



約
少
元

伸

震



~ 5
1814





蝶猶約し下



卒社

河代好乃とておもひ風也き

洲白鳥居人法中ちうき色一ハ
伊達乃世風物也一軒あし
字れハ蘇乃款代いらよ乃初
也ハ山てせん息

十部程ハ文好とてんきて保江者 三城

いし鳥比一連之とてんきて保江者 胡冬

出羽守

花のや古くさうさういふ事は
秋の来ぬ海に今もあつた
早川や好む花をさうさうに
栞門

七
リ

早命やに波の鳴門にゆき
セリよめても信せよ遠らん少
きまもこけ小波よどく光る
栞門

秋
歌

詠
別

あさふよふの信はちとちと
秋歌の花をさうさうに
いそよ本や泥舟よ早れ
船かひはけの事やら二日
あはれはの指をさうさうに

詠
別
三
三

一露

おしなまき草の葉はあははきり
叶の葉はあははきりやあはの玉
起きとらうあははきりあははきり
芙蓉

二麻

あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり

田の中は住うか
あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり

三糸

あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり
あしなまき草の葉はあははきり

魂系

舟を運と筆し乃舟守まのし東へけ 大津 船壳
 蓮乃火やふくたはせをくり船 之房
 以てし佛とあらまや多水薫 カサ 窓

東の秋

東の秋也雲はる繁く好の月 後 千ふ

垣のよふをいあまらうきし好歌 景
 新あはちりきこねる心はくし 芙蓉
 子月涼り入さけ梅香らふねん 虫

編

けのし編の雲はりていさ歌よふ ぬこ
 せつ 又お出やけし編乃花 さい
 葉落穂よ出るる尻甘とらる付 食

好水

ふさくくは河原よる一^ミく大虚
ゆきくく乃乃氣来^ミの坪^ミ水^ミ翠
流き^ミ水^ミいせく^ミの^ミ新^ミ乃^ミ元^ミ荒

鷹

く^ミの^ミ鷹^ミ也^ミい^ミ合^ミと^ミと^ミ出^ミあ^ミる^ミく^ミユ^ミ水^ミ

智^ミ取^ミや^ミく^ミら^ミら^ミる^ミ進^ミハ^ミく^ミら^ミる^ミミ^ミナ^ミら^ミる^ミ
初^ミく^ミは^ミ取^ミは^ミく^ミ縁^ミ乃^ミく^ミら^ミ取^ミ籠

をのく^ミ殺^ミ釣^ミよ^ミ出^ミく^ミの^ミ

控^ミく^ミく^ミ代^ミ並^ミよ^ミ

抑^ミり^ミく^ミら^ミ也^ミ殺^ミよ^ミく^ミき^ミて^ミ好^ミ水^ミ海^ミ訊^ミ行
殺^ミけ^ミり^ミや^ミえ^ミ密^ミ中^ミは^ミあ^ミ合^ミ点^ミ美^ミ養
去^ミは^ミ竿^ミて^ミ釣^ミて^ミ足^ミを^ミえ^ミ殺^ミれ^ミ合^ミ推
鯨^ミ釣^ミ也^ミ入^ミ日^ミ尔^ミ垂^ミく^ミあ^ミ赤^ミ心^ミ龍^ミ行^ミ三

西風の吹くはるかに アキハル 秋風

雷と鳴るはるかに イナズナ 稲

茶畑とくはるかに チヤ 茶

鳥

いせうしとさる路告るはるかに イセウシ 倉

海とくはるかに ウミ 海

鳩とくはるかに トビ 鳩

秋炮も鳴るはるかに アキハ 市

菊

山とくはるかに ヤマ 車

菊の日は女子は キク 推

糸のひらき

垣とくはるかに イハ 下

きよの菊とくはるかに キヨ 日 万里

中らしき菊の待たぬや思ふはん 七 万部
日安 花繁

ほろ月

そよ木音のささるるは月 七 涼危
わくあ月の澄きさるわのら好月 日 南里
をじよは海はらりるや好月 夫 呂物
そはらりるさるるの代は月 市休

又ハ出川呈張らるるは月 新編景 坡三

歌〜長源

河父親孫のらるるや樹とらん 七 幾
親指や子の泣親ハカ音 下 翠

暮の挽

新編をきん〜菊の好〜 倉 倉

五十一

詣山王

口やこすもすも好のこれ 筆董

くは穂はらへも梅は香ふらり 芙蓉

白多々也風子角き川松の香 正考

冬之部

祢云治さえ也や祢臣の夢 赤柳

取海の夢むるも是さじ一麿屋店 列

銘炮乃香と羽とささるさうぬ サヌキ 柳船

山王乃こそ細く寒さ式 アキ集 一雨

貫強比角くおもく此るさあ 范字

九

九

山里ハあさむしりてくさくさく

木枯

ふ〜紙杖〜洗〜さ〜る〜坂宿母

風乃月控之〜く〜く〜と〜和

有徳や中〜ふ〜て下ハ念佛〜鉄砂

猿や洞

風や控〜く〜海〜是侯

落葉 芭蕉心

指少〜も〜て〜也〜蕉

猿人北徳着ハ〜葉

葉刈乃帯江〜素丸

鳥

酒客〜通〜養

藥

廿

三日舟乃余波をたぐりて波ちり
昔も乃と浪をたぐりて出れば海
君

さつりあへく

島なりく浪をたぐりてあはれ
追風や浪をたぐりて波千島
胡冬

はあさ乃波は所願く

千島なりくお波の回らりて造
波のなりくしるやさよ浪ちり
東行
香栞

舟

舟の波をたぐりて波ちり
水はたぐりて波ちり
舟
波
彼朝

伏田の舟は

水はの花をたぐりて風を吹
舟
花
光

舟

光

水心

山の端ハから茶色がらと神サヌキ子原 佃
炭焼やあて池田に汲嚙佃中 柳水
福部川の椿はゆらぐやうも巻 葉雀
水鳥乃和らしてわらやふら穴 恙
あなまゝくも去よハ舟一 雪水梅 フシユ 釣垂
行脚乃江畔より行る

海へこと若くあつすやカヌキ 岩に 心

雲

鶴鶴に尾よふはくうはあま色ハ 心操
のまはれは雲霞海舟に舟併 山列
おろろくしあを破るや玉のりま 澄和
六川のらそまじり山玉あられ 麓
手くふ清くくもらや 雲霞 全飛

二書 宅代巻

初雪やきくは通しつゝ一園を白く 酒堂

くつ雪や霜に空をく草野に 風俗

初雪や茶臼を為りぬき母坂 拙才

たからし中をきく

けしきも花を葉もけり雪の花 炬久

初雪や誰とんりし杖の跡 鳥睡

初雪はわらわたりし雪 養

ついでにけりおれ半がた

雪乃ちいさくゆりはひそ

をくしりしれハ

はもかひけりし教や雪乃報 柳門

粹叩

業ハ奇の茶葉のしらきくさ 怨回

くはくはをく海なるの純きく 母風

新子とて合して拍子の時流よ 魯雅

歳暮

いほらうりよとてはよの書 純子
あふりさふらゆそり流 楓
智徳とほらふりしや年 曲翠
よふ年よとてはよの書 舎羅

天神奉納獨吟千句之面

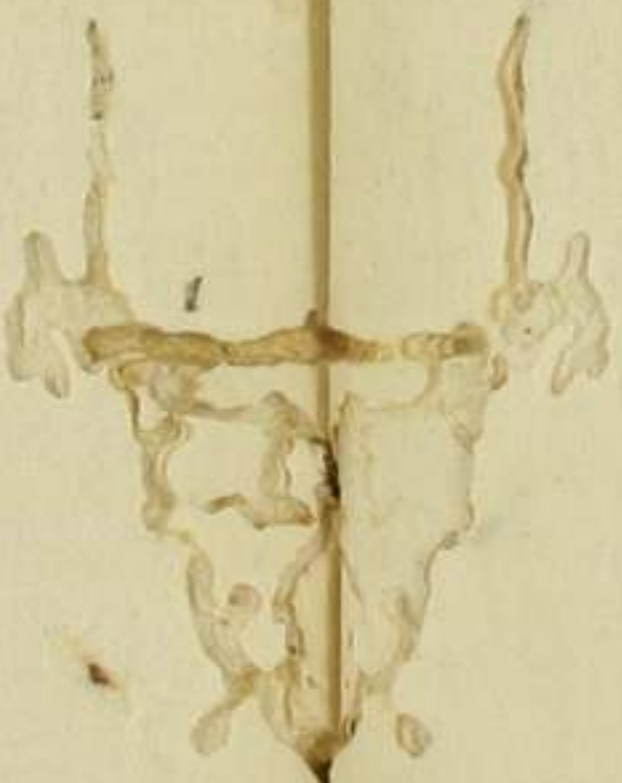
巻頭

何箱

芙蓉

新子とて合して拍子の時流よ
あふりさふらゆそり流
智徳とほらふりしや年
よふ年よとてはよの書

空の性乃顔と放氣に似り
一かたふたふたの情をこゝろに
名をらふらふ如く花を
瘦教の道に
角力に止らねば
舟の舟も此の代味ある葉の穢
ゆらゆらの物をとまて落す



第三

何

一字
露歌

芙蓉

心色と毎々花乃を路うら
馴れがたき千の秋鳥乃轉り
商毛今以春也と市小紫く

約

花

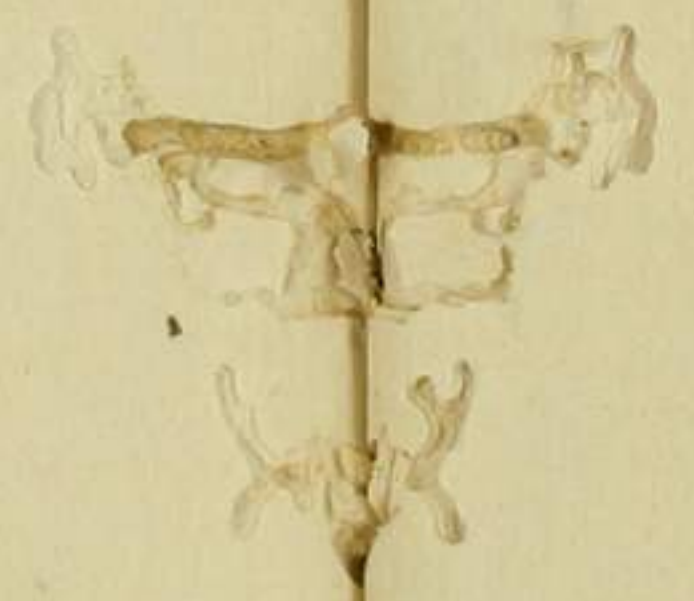
仙舟世一了... 病不之止て... 竿て指... 弓張子... 新キ... 向引... 又換... 藤と病す

第四
春何

芙蓉

取分く卯乃... 裕一... 筆... 大工乃...

もろくならくさ兄や
此雲味法月う能ら
あふはくこ葉山子
味晴招者乃様ハ
第一月乃付ハ跡
一つと鴨如く



第五

何猿

芙蓉

涼く其山公
芙蓉如幸ハ
極く女乃

計一たゆみしつとせよ
清く清く清く清く清く
折うは折きし花乃る也
朝乃よりらしく清く清く
月出ずるもあふ花乃る也
色之を思ふも類の松極よ
ふら海なるさかしく聞か

第六

何四字
上畧

芙蓉

物もあらはしつとせよ
月月もくし折ぬるも
清く清く清く清く清く

是乃其門より江切ららく
擲を積るべきけい船へ
此あらうとていさして海に
擲せしむる余はうら
多く廣く神不
汲船の塵義よ
菟角行若いあらうら

三

三

第七

何人

芙蓉

孝乃躬そくや月の歌
軒より所編法
何馬乃鞭を体る

三

三

屏風に風はあれやしの合
出づるもろのあきなり今も
相場は觸く通るなりなり
麦薈はは舞うるふゆの海
三里来ははも三里行はら
井酒も手はなひさるる春
同し若字もおかし信は

第九

来何

芙蓉

唐のや歸の神を八分の由り羽
月とせらおに 殊るを
世も一と美はれを今も松の心

白

三

此は世にやむ事なきに
日並しんハセうく東の
物事いん乃好らきと後
眠るく物ハ白雲此
望たむ様あり諸と埒
本道と清くハうて基の
深しうとく動ノ事

巻軸

何 二字
返書

芙蓉

頂よあひ眼や里科と樂
美白乃ふくこと如月乃日
唯昔の如くもわく事

約下

三四

重なる児下かるいの上
二里の里松の連を旅の志
法氣のちの庭を流るく
月を空より布子衣袷後
じりり合多ハ糸竹
梅の籠秋の好く秋らし
乃ハ及古をわらゆる見分る

追加

諷竹

あまのかが破る雲は表々
作は牙のうらまへ馬の蹄
面をよみ加減くはよちをき也
ちよとよさうちの誰をもあま
遠くは世若くは海深うとあま
あまのち麻呂にけりあま

養
倉羅
行三
榊門
母風

至如月入るや其の意の事
後九十日猿の行も
筆

三

三

吊
婦〜ひ集はる〜小事

尚男の真慮〜を〜事
此と志〜は〜を〜徹乃

道〜〜外

永田氏

芙蓉

約下

三

元禄十五 午

元陽中旬

京寺町

井筒屋及云湯板

Faint handwritten text in the background, possibly bleed-through from the reverse side.

